

平岩弓枝

芸能社会

下



G・R・O

文春文

文藝春秋
江苏工业学院图书馆

芸 能 社 会
藏 书 (下) 章

平 岩 弓 枝



文 藝 春 秋



文春文庫

芸能社会(下)

定価はカバーに
表示してあります

1992年2月10日 第1刷

著者 平岩弓枝

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-716855-3

文 春 文 庫

芸 能 社 会
(下)

平 岩 弓 枝



文 藝 春 秋

芸能社会・下 目次

第七章	女優誕生		7
第八章	初舞台		69
第九章	花開くとき		122
第十章	歌手芝居		174
第十一章	返り咲き		226
第十二章	或る終末		280

単行本 一九八九年二月読売新聞社刊（上・下2巻に分冊）

芸能社会 下

第七章 女優誕生

1

大田芳和が、今月限りで竹山事務所を辞めたいと申し出た時、竹山勝子はあっけにとられた。なにしろ、寝耳に水だったからである。

「芳っちゃん、あんた、いったい……」

咄嗟とつさに浮んだのは、彼が独立するのかという思いであった。

タレントを大勢、抱えている事務所では、売れっ子のタレントには一人ずつ、担当をつけている。

担当になった社員は、そのタレントの仕事一切に責任を持ち、仕事先までついて行く。当然、気心も知れるし、親しくもなあって、仕事の悩みや、事務所への不平も話し合うようになる。或る時、その担当の社員がタレントを伴って独立して、新しい事務所を設立するなどということが起る。

大田芳和は竹山事務所でもっとも仕事が出来る社員であった。誠実で熱心な人柄が買われて、テレビ局でも、舞台関係でも、むしろ社長の竹山勝子よりも信用があるし、顔も広くなっていた。この業界では、珍しくインテリだし、それを全く、ひけらかさないところから、タレント達にも人気がある。

竹山事務所にしてみれば、かけがえのない社員であった。それにしては、竹山事務所が大田に支払っている給料は、他の事務所にくらべて安いし、待遇が格別、いいわけでもない。

そんなことを、竹山勝子は一瞬の中に、頭の中で数え上げた。

「うちの事務所に不満があるのなら、いってちょうだい。もし、お給料のことだったら考えてもいいけど……」

大田は謙虚に頭を下げた。

「そういうことはありません」

「でも、辞めるってのは、不満があるからでしょう」

竹山勝子が食い下り、大田は静かにもう一度否定した。

「不満ではありません。僕としては、社長にこの仕事の面白さを教えて頂いたわけですし、今日まで気持よく働かせてもらいました。社長には感謝していますし、自分勝手な理由で辞めさせて頂くのは、申しわけないと思っています」

「江尻明子と、なにかあったの」

竹山勝子の考えは、単純に発展した。

「あの人、女のくせに気が強いし、我儘だから……」

自分のことを棚に上げて、批判した。

「彼女が原因なら……」

「とんでもありません。そういうことじゃないんです」

「なにが理由よ」

「坂口愛子さんの個人マネージャーとしてやって行きたいと思ったのです」

「坂口愛子ですって……」

驚きと同時に、竹山勝子には、ほっとした感情の色が現れた。

彼が独立するとなれば、長谷由紀子や千種むつ子などのスターを、そっくりひき抜かれると思っていたのだ。

「坂口愛子一人のマネージャーになるというの」

「そうです」

「食べて行けないわよ、芳っちゃん」

サンフランシスコまで大田芳和が迎えに行った坂口愛子が、彼の要請に応じて、日本へ来て、桑原千加子の英語のせりふの指導をしているのは、竹山勝子も知っている。

英語の指導のギャラが、どのくらいのものか、どう破格に払ってもらったところで、OLの一カ月の収入と大差はない。

「それは、わかっています」

「あんだ、坂口愛子を女優にするつもり……」

漸く、竹山勝子は、大田の意図に気がついたようであった。

「成功するかどうか、わかりませんが……」

「それにしたって、新人のギャラでしようが……当分は、持ち出しになるでしょうよ」

「それも、覚悟です」

「売り込み先が、決ったの」

「いや、まだ、これからです」

「あんたにしたら、乱暴な話ね」

煙草を取り出して、竹山勝子は考え込んだ。

「あんだが辞めるのは、勿論、自由なんだけど、うちとしても、急に芳っちゃんにいなくなられても困るのよね」

「ひき継ぎは、きちんとしています」

「どうだろう。坂口愛子をうちの事務所に入れて、あんだが面倒みるってことにしたら」

短時間の中に、竹山勝子ははじめいた算盤勘定そろばんであった。

売り物の千種むつ子は妊娠中であった。今、撮っているテレビドラマが終ると、当分、開店休業になる。長谷由紀子のほうは盛りを過ぎていた。

竹山事務所にしても、これから新人が欲しいところであった。

「そういっちゃんんだけど、あんだが個人で仕事するより、竹山事務所の看板使ったほうが売

り出しいってこともあるんじゃないの」

それにも、大田は慎重に返事をした。

「ありがたいと思います。お願いしたいとは思いますが、僕は、社長も御承知のように、一本気で融通がききません。夢中になるとブレーキがきかないし、あっちもこっちもというようには出来ない人間です。それで、考え抜いた上で、決心したので、どうか、思い通りにさせて下さい」

竹山勝子はひき下らなかつた。

「じゃ、こうしたら……年末をひかえて、うちのほうも一人、手が足りなくなるのは困るし、至急、芳っちゃんの後釜を養成しなけりゃならないじゃないの。だから、あと半年……あと半年だけ、辞めるのをのばしてちょうだい。その間、坂口愛子はうちの事務所のあずかりってことにして、勿論、あんたは坂口愛子につきっきりでいいわよ。十一月になれば、千種むつ子は出産のため、当分、休養になるし、そうそうあんたに迷惑かけることもなくなると思うから……」

「半年ですか……」

「そう、六ヵ月……半年経ったら、売れても売れなくても、あんたは坂口愛子を連れて、うちを出なさい」

そこまでのいい切られると、大田にしても断りにくかつた。

別の世界で仕事をするならともかく、同じ芸能界で、坂口愛子売り出すためには、少くとも、竹山事務所とトラブルを起したくはない。

竹山勝子の言葉にいくらかの不安を残しながら、大田は結局、彼女に押し切られた。

が、竹山事務所に籍をおいても、大田が坂口愛子の売り出しに奔走するのは、公認になったわけである。

大田が最初に頭を下げに行ったのは、新劇出身の俳優夫婦がやっている新人養成所であった。個人で経営しているので、研究生の数が極めて少い。他の俳優養成所のように、何年間通って、その先はどのようなこのという制約もなかった。

「うちは、大田さんも知っての通り、何百人押しかけて来た中から十人しか研究生をとらない方針なんだし、途中から入るってことは無理ですよ」

大田とは古いなじみの、佐伯光夫という、その養成所の主宰者が苦笑した。

「そこを、なんとかお願いします。正式の研究生でなくて結構です。聴講生ということにでもしてもらって……皆さんの邪魔にならない片隅において頂けるだけでも結構ですから……」

大田芳和の熱心さに、佐伯光夫が負けた。もともと、彼は劇団をとび出したばかりの苦境時代に、大田が個人的に仕事をみつけて来たり、映画に売り込んだりして面倒をみたことがあった。その恩義からいっても、大田の頼みを無下に断ることは出来ない。

「まあ、一ぺん逢ってみるから、つれて来てよ」

というせりふが出れば、あとは大田の思う壺であった。

坂口愛子は特別聴講生という資格で、佐伯夫妻の「未来塾」の塾生になった。

その一方で、大田は日本舞踊の先生をみつけて来た。

NHKの邦楽番組のプロデューサーに頼んで、踊り上手で、しかも教え上手という松島流の若い家元を紹介してもらい、そこに坂口愛子を入門させた。

更に、声楽の個人教授を音大の先生に依頼した。

朝から晩まで、坂口愛子のスケジュールは大田によって作られた。

桑原千加子の英語の指導だけが仕事で、あとはすべて自分のためのレッスンである。

収入は僅かなものだったが、もともと、東京には住み家を持っていたし、母親からの仕送りもあった。

大田芳和のほうは、坂口愛子に関する限り、手弁当であった。タクシー代はもとより、佐伯光夫に対する謝礼も、テレビ局の、これと思うプロデューサーやディレクターに坂口愛子売り込むための一切の経費はすべて、大田の個人的支出になった。

大田は、坂口愛子のデビューにはかなりの計算を立てた。

ちよい役と呼ばれるような、かけ出しの役なら、すぐにでも仕事があったが、それはすべて避けた。

俳優志望の多くが、最初は通行人などの、その他大勢で仕事をする。

通行人や女中役などから見出されて、大きな役がつくという例も、まるでないことはなかった。五、六人がひとまとめで出るような役の中から、あの子、いいじゃないか、ということです。少しずつ、役がついて成長してスターになった女優もいる。

しかし、それはごく稀なケースであった。

主役は、そのスタートから主役であることが普通なのである。

劇団にしても、研究生の頃から、これはスターにする子、あれはその他大勢とおおよそ見当がついている。

スターになる条件はさまざまであった。

俳優としての才能、美貌の他に、経歴やコネクション、時には経済的なバックアップも必要であった。

それらの、どの一つがあっても、とりあえずスターになることは出来た。但し、生き残るためには、実力と人柄だといわれている。

なんにしても、スターはデビューからスターであったほうがなにかと重宝であった。

下積みから、のし上ってくるよりも短日月に勝負が決る。

まして、女優は若さと美しさが武器になる中に勝負に出たほうが、すみやかに栄光の座に押し上げやすい。

大田は、坂口愛子を最初からスターとしてデビューさせるつもりであった。

仮に最初から主役を射とめることが出来なかったとしても、準主役の、それも、役の上では主役よりもいい役で、女優としてのスタートを切らせたい。

だが、新人の売り込みは、熾烈しれつであった。

コマーシャルの仕事は断った。

コマーシャルで人気が出るのは容易だが、特定の或る商品のイメージが出来ると、ドラマで